

巻頭言

白洲次郎さんのこと

会長 山崎 學



白洲次郎は1902年（明治35年）2月17日生まれ。貿易商白洲文平・芳子夫妻の次男として生まれた。祖父は実業家で神戸女学院創設者の一人である白洲退蔵である。白洲家は元三田藩の士族の出である。次郎は精道尋常小学校から御影師範学校附属小学校高等科卒業後に1914年（大正3年）兵庫県立第一神戸中学校（神戸一中）に入学し、サッカー部に所属した。当時、父親からアメリカ車ページ・オートモビルのグレンブルックを買い与えられ級友等を乗せた写真が残っている。この同型車がいまでも次郎が住んだ東京町田市の旧居武相荘に展示されている。神戸一中時代に宝塚少女歌劇養成会（現宝塚音楽学校）の生徒と恋仲になった。祖父の退蔵がキリスト教伝道系学校の神戸女学院の創立に関わったことから白洲家に外国人女性教師が寄宿しており、彼女たちから直接英語を学んだ。1919年（大正8年）神戸一中を卒業し、ケンブリッジ大学クレア・カレッジに留学し、史学科の聴講生として西洋中世史、人類学を学ぶ。莫大な仕送りを受けつつ、のちに7代目ストラフォード伯爵となるロバート・セシル・ビング（ロビン）と親交し、イギリス貴族のライフスタイルを知る。自動車はブガッティ・タイプ35やベントレー・3リットルを所有し、ロビンとは終生の友となり、1925年冬にはベントレーを駆ってジブラルタルまでのヨーロッパ大陸旅行（グランドツアー）を実行している。

1928年（昭和3年）父の経営していた白洲商店が昭和金融恐慌の煽りを受けて倒産したため、留学を断念し、帰国を余儀なくされた。1929年（昭和4年）英字新聞「ジャパン・アドバタイザー」に就職して記者となった。伯爵・樺山愛輔の長男・丑二の紹介で妹正子と知り合い、京都ホテルで華燭の典を挙げた。1931年（昭和6年）から、ケンブリッジ留学時代の学友ジョージ・セールが社長を務め、機関車・兵器輸入と銀行業務を行っていたセール・フレーザー商会に勤務し取締役となり、1937年（昭和12年）日本食糧工業（後の日本水産）取締役となった。この間に商談で英国に赴くことも多く、駐イギリス特命全権大使であった吉田茂に面識を得て、イギリス大使館を定宿にすることになった。第二次世界大戦勃発の翌年1940年（昭和15年）東京府南多摩郡鶴川村に古い農家を購入し、鶴川村が武蔵国と相模国にまたがる場所にあったことから武相荘（ぶあいそう）と名付け、政治・実業の一線から離れて農業に励む日々を送った。

1943年（昭和18年）疎開先の次郎のもとに召集令状が届くも、英国時代に関係を深めていた東部軍参謀長・辰巳栄一に嘆願して握りつぶしてもらう。戦後、次郎と同じく吉田茂の側近になった辰巳であったが、2009年の米公文書記録管理局の機密解除の結果、辰巳はCIA協力者と

して日本の軍事機密をアメリカ側に漏洩していたことが判明している。次郎は1945年（昭和20年）、東久邇宮内閣の外務大臣に就任した吉田の懇請で終戦連絡中央事務局（終連）の参与に就任する。GHQの要求に対してイギリス仕込みの英語で主張すべきところは頑強に主張し、GHQ要人をして「従順ならざる唯一の日本人」と言わしめた。1946年（昭和21年）3月、終連次長に、8月には経済安定本部次長に就任し、1947年（昭和22年）6月、終連次長を退任した。1949年（昭和24年）貿易庁長官に就任して汚職根絶などに辣腕を振るい、商工省を改組して通商産業省（のちの経済産業省）を設立する。1951年（昭和26年）サンフランシスコ講和会議に全権団顧問として随行し、講和条約調印に立ち会う。この頃に吉田茂首相は次郎をアメリカ大使に就任させようとするが、アメリカ政府はアグレマン（承認）を出さず大使就任の話は立ち消えになった。また1952年（昭和27年）から1954年（昭和29年）まで外務省顧問を務めた。

1951年（昭和26年）東北電力会長に就任し、只見川流域の電源開発事業に精力的に動いて東北電力繁栄の基礎を築いた。1959年（昭和34年）東北電力会長を退任。1966年（昭和41年）に赤坂に転居。1982年（昭和57年）軽井沢ゴルフ倶楽部理事長に就任。1985年（昭和60年）11月28日に、急性肺炎で赤坂の前田外科病院で死去した。（Wikipedia）

縁あって軽井沢町南原に別荘を建てたのが1982年である。別荘が近くだった軽井沢ゴルフ倶楽部のメンバーの知人に誘われて軽井沢ゴルフ倶楽部でプレイさせてもらうようになって、ザ・クラブと呼べる雰囲気魅せられてしまった。すぐに支配人と仲良くなり、知人の名刺で一人ラウンドを楽しむようになった。やがて雪駄を履いて双眼鏡をもった長身で日本人離れした風貌の男性と顔を合わせるようになった。ウィークデイにラウンドしていると「若い者がウィークデイにゴルフをするな」とニヤッと笑って話しかけられるようになり、機嫌がよいと「昼飯を付き合え」といってランチに誘われるようになった。最初は緊張感で食事がのどを通らなかったが、僕と同じ吃音気味の口調と人懐こい笑顔に誘われて緊張も段々とほぐれていった。今となっては何を話したか覚えていないがカレーをスプーンで食べているゲストを見て、スプーンはスープを飲むための食器で、カレーはフォークで食べなきゃ駄目だと教えられたことだけが頭の隅に鮮明に残っている。その後に英国滞在中にインド料理屋でカレーを注文したらやはりフォークが添えてあった。今でも軽井沢ゴルフ倶楽部ではカレーライスを注文するとフォークが添えられてある。

食堂のテラスに陣取り、9番ホールを上がってくるゴルファーのマナーを双眼鏡で観察してホールアウトしたゴルファーを手招きして注意していた姿を今でも鮮明に憶えている。軽井沢ゴルフ倶楽部で娘婿の牧山圭男さんとラウンドしたり、鶴川村にある武相荘を訪れて生前に次郎さんが好きだった親子どんぶりを食べたり、次郎さんが着ていた和服でつくられた、購入品の財布を見ると、人懐こい悪戯好きの少年のような次郎さんの笑顔を思い出す。遺言は「葬式無用、戒名不用」。石原慎太郎は「葬式不要、戒名不要、我が骨は必ず海に散らせ」。さて息子になんて申し送ろうかなあ。